

6/14 Sun.

第150回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.150 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

6/16 Tue.

第693回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.693 / Suntory Hall 19:00

6/17 Wed.

非破壊検査 presents 第44回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.44, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

指揮
Special Guest Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Guest Concertmaster

ショパン
CHOPIN

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

小林研一郎 (特別客演指揮者) -p.5
KEN-ICHIRO KOBAYASHI

牛田智大 -p.7
TOMOHARU USHIDA

白井 圭 (ゲスト)
KEI SHIRAI

ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21 [約32分] -p.10
Piano Concerto No. 2 in F minor, op. 21

- I. Maestoso
- II. Larghetto
- III. Allegro vivace

交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] -p.11
Symphony No.5 in E minor, op. 64

- I. Andante – Allegro con anima
- II. Andante cantabile, con alcuna licenza
- III. Valse: Allegro moderato
- IV. Finale: Andante maestoso – Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛：非破壊検査株式会社 (6/17)

協賛：JR東海 (6/17)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会 (6/14、16)

協力：横浜みなとみらいホール (6/14)、コジマ・コンサートマネジメント (6/17)

※6/17公演では読売テレビの収録が行われます。

6/23 Tue.

第659回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.659 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

グリーグ
GRIEG

[休憩]
[Intermission]

ショスタコヴィチ
SHOSTAKOVICH

上岡敏之 -p.6
TOSHIYUKI KAMIOKA

ホアキン・アチュカロ -p.7
JOAQUÍN ACHÚCARRO

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16 [約30分] -p.13
Piano Concerto in A minor, op. 16

- I. Allegro molto moderato
- II. Adagio – III. Allegro moderato molto e marcato

交響曲 第8番 ハ短調 作品65 [約61分] -p.14
Symphony No.8 in C minor, op. 65

- I. Adagio – Allegro non troppo – Allegro – Adagio
- II. Allegretto
- III. Allegro non troppo
- IV. Largo
- V. Allegretto – Adagio – Allegretto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

※本公演では日本テレビの収録が行われます。

6/27 Sat.

第288回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.288 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

6/28 Sun.

第288回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.288 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor

ソプラノ
Soprano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

ワーグナー
WAGNER

ワーグナー
WAGNER

[休憩]
[Intermission]

ブラームス
BRAHMS

上岡敏之 -p.6
TOSHIYUKI KAMIOKA

アウシュリネ・ストウンディーテ -p.8
AUSRINE STUNDYTE

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇〈タンホイザー〉序曲 [約14分] -p.16
"Tannhäuser" Overture

ヴェーゼンドク歌曲集 [約21分] -p.17
Wesendonck Lieder

1. Der Engel 天使
2. Stehe still! 止まれ!
3. Im Treibhaus 温室で
4. Schmerzen 悩み
5. Träume 夢

交響曲 第4番 ホ短調 作品98 [約39分] -p.22
Symphony No. 4 in E minor, op. 98

- I. Allegro non troppo
- II. Andante moderato
- III. Allegro giocoso
- IV. Allegro energico e passionato

※当初の発表から、出演者が一部変更になりました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮

小林研一郎
（特別客演指揮者）

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

“炎のコバケン”が
チャイコフスキーで
渾身のタクト!



“コバケン”の愛称で親しまれ、絶大な人気を集める名匠・小林研一郎が得意のチャイコフスキー5番などを振り、エネルギー^{みなぎ}漲るタクトと深みのある音楽性で、会場を深い感動に包み込む。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、および特別賞を受賞。これまでにハンガリー国立フィルの音楽総監督、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々の楽団のポジションを歴任した。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれスメタナ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。また、ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章（同国で最高位）などを授与される。国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞などを受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。作曲家としても多くの作品があり、1999年には日本・オランダ交流400年記念の委嘱作品である管弦楽曲〈パッサカリア〉が、ネーデルランド・フィルによって初演された。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル、名古屋フィルおよび群馬響の桂冠指揮者、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学、リスト音楽院の名誉教授、ロームミュージックファンデーション評議員などを務めている。著書には『指揮者のひとりごと』（日本図書館協会選定図書）などがある。2011年から読響特別客演指揮者を務め、数々の名演を残している。

6/14
横浜マチネー

6/16
名曲

6/17
大阪定期

Maestro

6/23
定期

6/27
土曜マチネー

6/28
日曜マチネー

Maestro

指揮

上岡敏之

TOSHIYUKI KAMIOKA, Conductor



©読響

沸き上がる、
圧倒的なサウンド。
上岡が熱い思いを込める

ドイツを拠点に欧州で活躍し、音楽への一途な愛を注ぐ鬼才・上岡敏之がショスタコーヴィチ、ブラームスなどを振り、重厚感あふれる音楽を築き上げる。

東京生まれ。東京芸術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。ロータリー国際奨学生としてハンブルク音楽大学に留学、クラウスペーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペイトールおよびカペルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。

これまでに、エッセン歌劇場第1指揮者、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィル首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場音楽総監督、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントなどの要職を務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、好評を博した。現在コペンハーゲン・フィル名誉指揮者。ケルン放送響、バンベルク響、バイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響などに客演し、高い評価を得る。また、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授も務めている。

日本では読響のほか、N響、大阪フィルなどと共演し、2016年から5シーズンにわたり新日本フィルの音楽監督を務めた。ホテルオークラ音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

読響とは1998年以降、共演を重ね、ベートーヴェン、ブラームス、R.シュトラウス、マーラーなどを指揮し、多くの名演奏を残している。またピアニストとして《読響アンサンブル・シリーズ》にも度々登場している。



©Ariga Terasawa

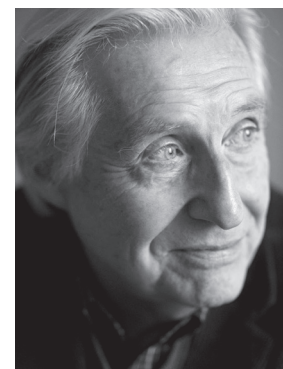
ピアノ

牛田智大

TOMO HARU USHIDA, Piano

近年ますます芸術性を深め、ストイックな姿勢で音楽性に磨きをかける俊英ピアニスト。1999年福島県いわき市生まれ。2012年にクラシックの日本人ピアニストとして当時最年少でCDデビュー。16年にはNHK「プロフェッショナル/仕事の流儀」の特番でも取り上げられ、大きな話題を呼んだ。国内各地でリサイタルを行うほか、プレトニョフ、カスプシク、小林研一郎ら巨匠の指揮で、ロシア・ナショナル管、ワルシャワ国立フィル、ハンガリー国立フィル、プラハ響など国外の一流楽団と共演した。18年の浜松国際ピアノコンクール第2位、ワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。19年出光音楽賞、24年リーズ国際ピアノ・コンクール聴衆賞、25年日本ショパン協会賞を受賞。読響とは2016年以降、たびたび共演を重ねている。

世界の檜舞台で活躍してきた現代最高峰のピアニスト。1932年スペインのビルバオ生まれ。59年のリヴァプール国際コンクールで優勝以降、スペイン、フランス、イタリアなどの国際コンクールで入賞し、早くから注目を浴びる。これまでにアバド、メータ、小澤征爾、シャイー、ラトルらの指揮で、ベルリン・フィル、ニューヨーク・フィル、シカゴ響、フランス国立管、BBC響などと共演。数多くの録音を残しており、ロドリゴのピアノ協奏曲をリリースして好評を博した。スペインでは最も権威ある芸術賞の数々を受賞しており、2000年には平和のためのユネスコ・アーティストに選出、03年にはスペイン国王ファン・カルロス1世(当時)により国家功労十字勲章を授与された。読響とは1990年、2016年、2019年に続き4度目の共演。



©Jean-Baptiste Millot

ピアノ

ホアキン・アチュカロ

JOAQUÍN ACHÚCARRO, Piano

6/14
横浜マチネー

6/16
名曲

6/17
大阪定期

Artist

6/23
定期

Artist

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Artist



©Dominik Odenkirchen

ソプラノ

**アウシュリネ・
ストウンディーテ**

AUSRINE STUNDYTE, Soprano

圧倒的な存在感と力強い美声を誇り、ザルツブルク音楽祭やウィーン国立歌劇場で活躍するドラマティック・ソプラノ。リトアニア出身。リトアニア音楽演劇アカデミーおよびライブツィヒのフェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ音楽演劇大学で学ぶ。これまでに英国ロイヤル・オペラやパリ・オペラ座など欧米各地の歌劇場に出演しており、〈エレクトラ〉〈サロメ〉〈トスカ〉の表題役、〈トリスタンとイゾルデ〉イゾルデ、〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉カテリーナなど数多くの難役でメータやパッパーノらと共演。2025/26年シーズンは、英国ロイヤル・オペラ、ウィーン国立歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、バイエルン放送響に登場するなど活躍を続けている。読響初登場。

6/14

横浜マチネー

6/16

名曲

6/17

大阪定期

Program Notes

ショパン

ピアノ協奏曲 第2番 へ短調 作品21

1829年7月、ウィーンを訪れたフレデリック・ショパン（1810～49）は、ケルントナートーア劇場で演奏会を開いて大評判を呼んだ。ウィーンでの活躍はワルシャワの新聞でも報じられ、故国でのショパンに対する期待を一段と高めた。ぜひワルシャワでもショパンの演奏を聴きたい。そんな人々の求めに応じて、1830年3月にショパンの演奏会が開催されることになった。この公演のために用意されたのがピアノ協奏曲第2番へ短調である。出版順に従って「第2番」の番号が与えられたが、作曲順では第1番よりもこちらが先に書かれている。

「演奏前の3日間がどれほど辛いものか、わからないだろう」（ショパンから親友ティトゥスへの手紙）と作曲者は心配したが、公演は大成功を収めることになった。現地の外国特派員新聞は「ピアニストとしては情感の繊細さと審美眼の洗練においてフンメルをも凌駕する。作曲家としても一流の水準にある。やがてポーランドもヨーロッパ最大の演奏家と作曲家のひとり有する名誉にあずかることだろう」と、鋭くもショパンの才能を見抜いている。

第1楽章 マエストーソ やさしい問いかけに決然と答えるかのような管弦楽の第1主題で開始される。オーボエが憧憬に満ちた第2主題を奏でる。入念な提示部の末に独奏ピアノが登場し、華麗な名技性を発揮しながら情感豊かな楽想をくりひろげる。

第2楽章 ラルゲット 夢想するかのような甘美なロマンス。ショパンが「理想の女性」と呼んだコンスタンツィヤ・グワトコフスカへの想いが込められている。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 独奏ピアノによる民俗舞曲風の主題で開始され、管弦楽が応答する。独奏ピアノが優美で技巧的なパッセージを次々とくりだす。弦楽器のコロ・レーニョ（弓の木の部分で弦を叩く奏法）が登場するのが特徴的。ひなびた調子のホルンのソロが、きらびやかな終結部を予告する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1829～30年／初演：1830年3月17日、ワルシャワ／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー

交響曲 第5番 へ短調 作品64

1888年春、ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は弟モデストやパトロンのメック夫人への手紙で、新しい交響曲に取り組むことを宣言する。前作の第4番からは10年の月日が経っており、筆は容易に進まない。「創作意欲がすっかり失われ、アイデアもインスピレーションもわからない」「もっと努力が必要だ。自分が終わった作曲家ではないことを他人だけではなく自分自身にも証明したい」「時が過ぎ、老いが迫り、一瞬一瞬が貴重だ」。残された手紙からは苦しむ作曲家の姿が伝わってくる。だが、夏になると「仕事は順調に進んでいる。気分がよい」「旧作に劣らない作品が仕上がるだろう」と自信を取り戻している。

初演後もチャイコフスキーの自作への信頼は揺れ動く。「この曲には過剰さ、不誠実さがある」「日が経つにつれ失敗作だという確信が強まる」。だが、翌年のハンブルク公演で大成功を収めると、「この交響曲がふたたび好きになった」と見方を改めた。これほどの名曲を書いても本人はその価値をなかなか信じきれないのだから、自作を客観視するとはなんと困難なことなのだろうか。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ クラリネットによる寂しげな「運命の主題」が奏でられる。構想段階のメモによれば、これは「運命に対する完全な服従」。全楽章にわたって、この主題が姿を見せる。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ 弦楽器による静かな序奏に続いて、ホルンが哀愁を帯びた旋律を奏でる。

第3楽章 ワルツ アレグロ・モデラート スケルツォの代わりに流麗なワルツが置かれる。中間部は軽やかで、こちらがスケルツォ風の性格を持っている。

第4楽章 フィナーレ アンダンテ・マエストーソ～アレグロ・ヴィヴァーチェ 堂々たる「運命の主題」で開始される。躍動感あふれる楽想が続き、輝かしく祝祭的な終結部へと向かう。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1888年11月17日（西暦）、サンクトペテルブルク／演奏時間：約50分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

6/14

横浜マチネー

6/16

名曲

6/17

大阪定期

Program Notes

グリーク

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

19世紀ヨーロッパでのナショナリズムの高まりの中で、ノルウェーの国民楽派を確立したエドヴァルド・ハゲルupp・グリーク(1843~1907)。最初は初期ドイツ・ロマン派の様式から出発した彼だったが、やがて熱い愛国心を持つ同郷の音楽家たちに鼓舞され、西洋音楽の垂流を脱した独自の道を歩み始める。民謡スタイルのピアノ小品や室内楽での試みを経て、25歳の彼が取り組んだ本作(1868)は、ドイツ的な構築性と瑞々しい叙情性に輝かしい演奏技巧を融合し、“ノルウェーの作曲家グリーク”の名を一躍世界に知らしめた。

第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート、イ短調、4分の4拍子、ソナタ形式。ティンパニのクレッシェンドに導かれて独奏ピアノが登場するこの序奏ほど、斬新な協奏曲の開始はない(しばしばシューマン作品と比較される)。木管による素朴な第1主題に対して、第2主題は伸びやかな歌であり、大胆な転調が含まれる。展開部では短くも充実した動機展開が行われ、型通りの再現部の後、第1主題を堂々と歌いあげるカデンツァが圧巻である。

第2楽章 アダージョ、変二長調、8分の3拍子、三部形式。弱音器を付けた弦楽器による深いロマンを湛えた主部に対して、独奏ピアノが奏でる凛とした中間部は、北欧の夜想曲のようだ。ピアノによる情熱的な主部再現の後、音楽は途切れずに次楽章に進む。

第3楽章 アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート、イ短調~イ長調、4分の2拍子、ロンド・ソナタ形式。ノルウェーの民俗舞曲ハリング風のロンド主題が二つのエピソードと交替しつつ発展し、最後は3拍子のスプリンガー舞曲に変わる。コーダでは中間部の主題が雄大に再現されるが、その二度目は長音階ではなくミクソリディア旋法に変わる(イ長調のソ#がソに変わる)ことで、北欧らしい野性味を帯びる(この箇所を聴いたリストが、“これこそ北欧だ!”と叫んだという)。

〈千葉 潤 音楽学〉

作曲：1868年、改訂1906年／初演：1869年4月3日、コペンハーゲン／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ショスタコーヴィチ

交響曲 第8番 八短調 作品65

今年、生誕120年を迎えた作曲家ドミトリー・ドミトリエヴィチ・ショスタコーヴィチ(1906~75)の音楽は、彼が生涯を送ったソ連の歴史と密接に結びつきながらも、そのスコアに刻まれたメッセージは、いまだに現在性(アクチュアリティ)を失わない。独ソ戦時代の“戦争交響曲”のうち、八長調の第7番(レニングラード)(1941)が国民に向けた愛国的呼びかけだとすれば、八短調の第8番(1943)は戦争の非人間性を芸術的な手法で表現した音楽の鎮魂碑であり、戦火の絶えない現在、その真価がますます認められつつある。

全体は5つの楽章からなり、ショスタコーヴィチの豊かな音楽性を具現するかのよう、バロック時代のフランス風序曲を思わせる荘重なアダージョで始まり、世俗音楽の辛辣なパロディ(第2楽章)、冷たく無機質なトッカータ(第3楽章)、厳粛なパッサカリア(第4楽章)を経て、フィナーレはマーラー風の“モレンド(消えゆくように)”で結ばれる。交響曲としての一貫性や物語性も強固であり、全楽章は冒頭で提示される基本音型(ド・シ・ド、またはド・レ・ド)によって主題的に統一され、第3楽章から第5楽章までは続けて演奏される。強い印象を残すのは、両端楽章のクライマックスを成すトゥッティの強烈なクレッシェンドであり、これが音楽の流れを破局へと導くことになる。

当時、報道を通して戦地の惨状を知ったショスタコーヴィチにとって、これ以外の表現は不可能だったろう。1948年のジダーノフ批判では、その悲観性が仇となって事実上の演奏禁止となり、ソ連で再び陽の目を見たのは1960年であった。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロppo～アレグロ～アダージョ、八短調、4分の4拍子の序奏と第1主題、4分の5拍子の第2主題によるソナタ形式。展開部では叙情的な主要主題が金管中心の狂暴な行進曲と化し、胸を^{えぐ}抉るような壮絶なドラマを繰り広げる。強烈なクレッシェンドで序奏が再現された後、緊迫した空気を鎮静するイングリッシュ・ホルンの独奏が印象的だ。

第2楽章 アレグレット、変二長調、4分の4拍子、行進曲風のスケルツォ。パロディを得意としたこの作曲家の面目躍如たる楽章。主題の前半はドイツの〈ピア樽ポルカ〉の歪んだ^ほ仄めかし、後半は作曲者自身の〈ジャズ組曲第2番〉「スケルツォ」

の転用である。中間部では、半音ずつ上下に広がっていく半音階を基にした主題が、自由に歌い継がれる。滑稽だった行進曲が次第に狂躁を帯び、中間部主題の激しいフガートに至る再現部は、陽気な日常がいつの間にか恐ろしいファシズムに変わる現代社会の見事なカリカチュアである。

第3楽章 アレグロ・ノン・トロppo、ホ短調、2分の2拍子、三部形式。主部では、トッカータ的な器楽音型をオーケストラの各パートが剥き出しのユニゾンで繰り返し、基本音型を变形した主題が爆撃音さながらに下行する。独奏トランペットによる軍楽風の間部は、いわゆる“死の舞踏”だろうか。切迫したクレッシェンドが切れ目なく次楽章を導き出す。

第4楽章 ラルゴ、嬰ト短調、4分の4拍子。殺伐としたトッカータにつづくのはパッサカリアの葬送行進曲であり、虚ろな独奏を伴う11回の変奏のあとで、ようやく澄み切った八長調に到達する(ショスタコーヴィチは、「この長調に私がどれほどの血を流したのか」と語ったという)。

第5楽章 アレグレット～アダージョ～アレグレット、八長調、4分の3拍子、ロンド・ソナタ形式。ファゴットが朗らかにロンド主題を提示するが、展開部では大規模なフガートに発展し、やがて悲劇を呼び覚ますように第1楽章の威圧的なクレッシェンドが回帰する。次第に室内楽的なテクスチュアに移行しながら二つのエピソードが逆順で再現され、最後は、淡い八長調の響きの中で基本音型をつぶやきつつ、静寂へと消えていく。

〈千葉 潤 音楽学〉

作曲：1943年／初演：1943年11月14日、モスクワ／演奏時間：約61分

楽器編成／フルート4(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、シロフォン、タンブリン、トライアングル、銅鑼)、弦五部

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

ワーグナー

歌劇〈タンホイザー〉序曲

リヒャルト・ワーグナー（1813～83）は、ドイツ・ロマン派の時代を代表する作曲家です。彼はオペラを単なる音楽作品としてではなく、文学、演劇、舞台美術などを含む総合芸術として構想しました。ドイツの神話や伝説に題材を求めた深遠な物語は、一度その世界に触れると忘れがたい力を持ち、この「毒を含んだ」響きに魅了された熱狂的な愛好者たちは「ワグネリアン」と呼ばれます。

〈タンホイザー〉の正式な題名は、『「タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦」3幕のロマン的歌劇』です。ヴァルトブルクとは、ドイツ中部アイゼナハにある城の名です。この作品は1845年（32歳）の春に完成し、同年10月19日、ドレスデンのザクセン宮廷劇場で初演されました。中世の詩と伝説に基づく「タンホイザーとヴェーヌスベルク」と、中世の伝説および史実に由来する「ヴァルトブルクの歌合戦」という、別個の二つの題材を合わせて作られたオペラです。初演時には難解とされ、評価は必ずしも高くありませんでしたが、ワーグナーは上演を重ねるごとに改訂を加え、作品は次第に高い評価を獲得していきました。

主人公は中世の歌人騎士タンホイザーです。彼は官能的な愛に溺れた過去を悔いながらも、吟遊詩人たちによる歌合戦の場で、愛とは精神的なものだけでなく、快い享楽をも含むものだと歌い、非難を浴びます。やがて彼は贖罪のためローマへの巡礼を命じられ、旅の果てに、死とともに神の赦しを得ることになります。官能の愛と精神の愛、その両極のあいだで揺れ動く人間の葛藤が描かれています。

〈序曲〉は物語の縮図ともいえる音楽です。冒頭、管楽器によって荘重に奏でられるのは「神の恩寵による救済の主題」。それに続いてチェロが示すのが「悔恨の動機」です。救済と悔恨、官能と精神、罪と赦し。こうした対立する要素が強い個性をもって描き分けられます。

〈小味瀧彦之 音楽学・音楽評論〉

作曲：1843年7月～1845年4月（オペラ全曲）／初演：1845年10月19日（オペラ全曲）、ドレスデン／演奏時間：約14分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン）、弦五部

ワーグナー

ヴェーゼンドンク歌曲集

歌曲集の題名は、富裕な貿易商の妻マティルデ・ヴェーゼンドンクにちなみます。5曲の歌詞も、すべてこのマティルデの手によるものです。1852年、亡命先のスイス・チューリヒで、ワーグナーは繊維を扱うオットー・ヴェーゼンドンクと知り合いました。オットーはワーグナーの借金を肩代わりし、音楽祭の資金を提供しただけでなく、1857年春には自ら所有する土地に簡素な住居を建て、ワーグナーをそこに住まわせました。ワーグナーはその家を「隠れ家」と名づけます。しかし、こともあろうに彼はそこで、オットーの妻マティルデとの密会を重ねることになります。いわくつきの住まいであったわけです。不倫関係が発覚した後も、オットーはワーグナーへの援助を続けたといえます。その心境はいかなるものであったのでしょうか。

原曲は、女声とピアノのために書かれました。第1曲「天使」は1857年（44歳）10月に、第4曲「悩み」と第5曲「夢」は同年12月に、第2曲「生まれ!」は1858年2月に、第3曲「温室で」は同年5月に、それぞれ推敲を経て完成しています。第5曲「夢」だけは、ワーグナー自身がヴァイオリン独奏パートを加えて管弦楽に編曲し、1857年12月23日、マティルデの29歳の誕生日祝いとして、ヴェーゼンドンク夫妻の前で初演しました。この曲は、のちに〈トリスタンとイゾルデ〉第2幕のクライマックスである「愛の場面」の原型となるもので、ワーグナー自身の許されぬ恋愛が投影されています。

まことに甘美な恋人同士の合作には、禁断の恋がもたらす陶酔と痛み、そして〈トリスタンとイゾルデ〉へと流れ込んでいく濃密な官能が、ひそやかに、しかし抗いがたい力をもって刻み込まれています。なお、第5曲「夢」以外の4曲については、のちにワーグナーの弟子の一人となるフェリクス・モットルが、ピアノ・パートを管弦楽に編曲しました。

〈小味瀧彦之 音楽学・音楽評論〉

作曲：1857年10月～1858年5月／初演：1857年12月23日、チューリヒ郊外ヴェーゼンドンク邸（第5曲「夢」のみ）・1862年7月30日、マインツ（全5曲）／演奏時間：約21分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット、ティンパニ、弦五部、独唱ソプラノ

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

《歌詞対訳》

ヴェーゼンドンク歌曲集

訳：小味淵彦之

1. Der Engel

In der Kindheit frühen Tagen
Hört ich oft von Engeln sagen,
Die des Himmels hehre Wonne
Tauschen mit der Erdensonne,

Daß, wo bang ein Herz in Sorgen
Schmachtet vor der Welt verborgen,
Daß, wo still es will verbluten,
Und vergehn in Tränenfluten,

Daß, wo brünstig sein Gebet
Einzig um Erlösung fleht,
Da der Engel niederschwebt,
Und es sanft gen Himmel hebt.

Ja, es stieg auch mir ein Engel nieder,
Und auf leuchtendem Gefieder
Führt er, ferne jedem Schmerz,
Meinen Geist nun himmelwärts!

1. 天使

昔々、子供のころ
天使たちが話すのを、よく聞いていた
彼らは天国のこの上もない喜びを
地上の太陽と取り替えるのだそうだ

心が悲しみに暮れて
この世界から隠されて苦しめば
心が静かに血を流して
涙の洪水の中で死んでゆくなら

その祈りが強烈に
ただ救済を請うならば
そこに天使が舞い降りて
優しく空へ運ばれる

そう、私にも天使がひとり舞い降りて
そして、輝く翼の上へのせ
あらゆる痛みから遠ざけて
私の精神は今や天へ!

2. Stehe still!

Sausendes, brausendes Rad der Zeit,
Messer du der Ewigkeit;
Leuchtende Sphären im weiten All,
Die ihr umringt den Weltenball;
Urewige Schöpfung, halte doch ein,
Genug des Werdens, laß mich sein!

Halte an dich, zeugende Kraft,
Urgedanke, der ewig schafft!
Hemmet den Atem, stillt den Drang,
Schweiget nur eine Sekunde lang!
Schwellende Pulse, fesselt den
Schlag;
Ende, des Wollens ew'ger Tag!

Daß in selig süßem Vergessen
Ich mög alle Wonnen ermessen!

Wenn Aug' in Auge wonnig trinken,
Seele ganz in Seele versinken;
Wesen in Wesen sich wiederfindet,
Und alles Hoffens Ende sich kündigt,
Die Lippe verstummt in staunendem
Schweigen,
Keinen Wunsch mehr will das Innre
zeugen:
Erkennt der Mensch des Ew'gen Spur,
Und löst dein Rätsel, heil'ge Natur!

2. 止まれ!

回り、とどろく時の車輪よ
永遠を切り裂く者よ
広い宇宙に輝く天体よ
地球を取り巻く者よ
永遠の天地創造よ、止まれ
生成は十分だ、放っておいてくれ!

止まれ、生まれる力
根源の思考、永遠に創造をするものよ!
その呼吸を止め、その衝動を静め
ほんの一瞬でも、黙るのだ!
高まる鼓動よ、その脈動を縛りつける
終われ、この尽きることのない日々の
欲望よ!

甘い至福の忘却の中で
私はすべてのこの上ない幸福を手
にしたい!

眼は眼の内に喜びをたたえるならば
魂は完全に魂の中に沈み込み
存在は存在の中に自分自身を見つけ出し
そして、すべての希望が終わりを告げると
くちびるは驚きのあまり黙り込む

いかなる望みも内には生み出されない
人間は永遠の足跡を知り
そしてお前の謎を解くのだ、聖なる自然よ!

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

3. Im Treibhaus

Hochgewölbte Blätterkronen,
Baldachine von Smaragd,
Kinder ihr aus fernen Zonen,
Saget mir, warum ihr klagt?

Schweigend neiget ihr die Zweige,
Malet Zeichen in die Luft,
Und der Leiden stummer Zeuge
Steiget aufwärts, süßer Duft.

Weit in sehndem Verlangen
Breitet ihr die Arme aus,
Und umschlinget wahnbefangen
Öder Leere nicht'gen Graus.

Wohl, ich weiß es, arme Pflanze;
Ein Geschicke teilen wir,
Ob umstrahlt von Licht und Glanze,
Unsre Heimat ist nicht hier!

Und wie froh die Sonne scheidet
Von des Tages leerem Schein,
Hüllet der, der wahrhaft leidet,
Sich in Schweigens Dunkel ein.

Stille wird's, ein säuselnd Weben
Füllet bang den dunklen Raum:
Schwere Tropfen seh ich schweben
An der Blätter grünem Saum.

4. Schmerzen

Sonne, weinest jeden Abend
Dir die schönen Augen rot,
Wenn im Meeresspiegel badend
Dich erreicht der frühe Tod;

Doch erstehst in alter Pracht,
Glorie der düstren Welt,

3. 温室で

高くアーチ状に、王冠のように茂った葉よ
エメラルド色の天蓋よ
遠く離れたところで生まれた子供たちよ
言っておくれ、なぜ嘆くのかを？

物言わず枝を傾け
空気の中に印をつけ
そして苦悩を黙っていることを示すのに
甘い香りを立ち上がらせている

遠く憧れた願望に
あなたたちは大きく腕を広げ
そして妄想にとらわれ
虚しさや意味のない恐怖を抱く

確かに私は知っている、哀れな植物よ
私たちが同じ運命であることを
明るく、輝きに包まれていても
私たちの故郷はここではないことを！

そして太陽が楽しげに
昼間の虚しく明るい光から立ち去れば
本当に苦しむ者は
沈黙の闇に包まれる

あたりが静かになって、織りなすざわめきが
不安げに暗い室内を満たせば
重いしずくが漂うのが見える
緑色をした葉の縁に

4. 悩み

太陽よ、あなたは毎夕泣いていて
その美しい瞳が真っ赤だ
鏡のように映る海の水面にその身を浸し
早すぎる死を迎える時は

しかし以前と変わらぬ輝きでまた昇る
陰鬱な世界の栄光よ

Du am Morgen neu erwacht,
Wie ein stolzer Siegesheld!

Ach, wie sollte ich da klagen,
Wie, mein Herz, so schwer dich sehn,
Muß die Sonne selbst verzagen,
Muß die Sonne untergehn?

Und gebietet Tod nur Leben,
Geben Schmerzen Wonne nur:
O wie dank ich, daß gegeben
Solche Schmerzen mir Natur!

5. Träume

Sag, welch wunderbare Träume
Halten meinen Sinn umfängen,
Daß sie nicht wie leere Schäume
Sind in ödes Nichts vergangen?

Träume, die in jeder Stunde,
Jedem Tage schöner blühen,
Und mit ihrer Himmelskunde
Selig durchs Gemüte ziehn!

Träume, die wie hehre Strahlen
In die Seele sich versenken,
Dort ein ewig Bild zu malen:
Allvergessen, Eingedenken!

Träume, wie wenn Frühlingssonne
Aus dem Schnee die Blüten küßt,

Daß zu nie geahnter Wonne
Sie der neue Tag begrüßt,

Daß sie wachsen, daß sie blühen,
Träumend spenden ihren Duft,
Sanft an deiner Brust verglühen,
Und dann sinken in die Gruft.

あなたは再び朝に目を覚ます
誇り高い勝利の英雄のように！

ああ、ならばどうして私は嘆く必要があるのか
わが心よ、どうしてそんなに重く沈むのだ
太陽さえもたじろがなければならぬのに
太陽さえも沈まなければならぬのに？

そして死だけが生を産み
苦しみだけが喜びをもたらす
ああ、どれほど私は感謝すればよいのか
自然がこの痛みを私に与えたことを！

5. 夢

言ってくれ、どんなにすばらしい夢が
私の気持ちを捉えているのかを
それは空虚な泡ではなく
荒れ果てた虚無の中へ消え去るものでは
ないかと？

夢、それはどんな時にでも
日毎に美しく咲き
そして天国からの知らせとともに
至福の喜びが引き寄せられる！

夢、それは聖なる光のように
魂の内側に沈み込み
永遠の光景を描き出す
すべてを忘却し、想起する！

夢、それは春の太陽が
雪の中からあらわれた花々にキスを
するように

思いがけない喜びに
新しい日を迎える

夢は成長して、花が咲く
夢見心地でその香りを振りまいて
そっとあなたの胸で燃えてから
お墓の中へと沈んでゆく

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

6/27

土曜マチネー

6/28

日曜マチネー

Program Notes

ブラームス

交響曲 第4番 ホ短調 作品98

ヨハネス・ブラームス(1833～97)は、ワーグナーの次世代に当たるドイツ音楽を代表する巨匠です。ブラームス本人の意図せぬところで、ブラームス(絶対音楽)派とワーグナー(標題音楽)派の対立が起きました。ブラームスは4曲の交響曲を残します。そのすべてが今日、各地のオーケストラにとって標準的なレパートリーとなっています。いずれも高い完成度を備えながら、異なる音楽的性格を持っている点も大きな魅力です。作品には、堅牢な構成の中に、むせび泣くような叙情性が息づいています。

交響曲第4番は、ウィーンの南西に位置する避暑地ミュルツツーシュラクで作曲されました。1884年の夏に第1、第2楽章が書かれ、翌85年(52歳)の夏に第3、第4楽章が完成されます。初演は1885年10月25日、マイニンゲン宮廷管弦楽団によって行われ、指揮台には作曲者自身が立ちました。この作品には外面的な華やかさはほとんどありません。第2楽章には古い教会旋法であるフリギア旋法が用いられ、第4楽章にはバロック時代の舞曲に由来するパッサカリア、すなわちシャコンヌに近い変奏形式が取り入れられました。古い音楽語法が現代的な交響曲の中に組み込まれたのです。

4つの楽章で構成。**第1楽章**では音が編み物のように緻密に重ねられ、一分の隙もない音楽が形づくられます。**第2楽章**はためらいを含んで丁寧な奏でられ、広がりを持った旋律が豊かに二度あらわれる場面が印象的です。**第3楽章**ではブラームスが交響曲で使った、ティンパニ以外で唯一の打楽器であるトライアングルが鳴り響きます。ピリリと辛い山椒のように音楽全体が引き締まります。**第4楽章**は、J.S.バッハのカンタータ第150番〈主よ、あなたを求めます〉の低声部の主題にヒントを得て書かれました。粛々と変化する表情が積み上げられていく音楽です。禁欲的とも言える厳しさを備えながら、揺るぎない独自のフィナーレが構築されます。

〈小味淵彦之 音楽学・音楽評論〉

作曲：1884～85年／初演：1885年10月25日、マイニンゲン／演奏時間：約39分

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(トライアングル)、弦五部